ISSN 2189-7476

森のちゃれんがニュース 2024 秋

北海道博物館
HOKKAIDO MUSEUM

Newsletter vol.37

第10回特別展「みんなの鉄道 ―がんばれ！地域の公共交通―」開催（2024年7月20日～9月23日）

地域を支える公共交通の大切さが見直される今、北海道の鉄道を中心に、公共交通の歩みや、さまざまな形で関わる人びとの物語について紹介しました。

１章「北海道鉄道史クロニクル」では、北海道に現存するレールでは最古となる「岩内・茅沼炭鉱のレール」や北海道の主な鉄道路線図を１枚の大きな床地図にして展示しました。夕張と江別をむすんだ夕張鉄道、札幌の定山渓鉄道など、なつかしい鉄道の駅名標やサボ（行先板）なども多数展示して、その歩みを紹介しました。

２章「鉄道をささえる、つかう　―人びとの物語―」では、「大箸」と呼ばれる巨大な工具、駅弁から寝台車、行商の道具など、鉄道とともにあったモノや想い出につながる資料を紹介しました。

また、世代をこえてみんなで鉄道を楽しんでもらえるよう「みんなの鉄道ひろば　鉄道ライブライリー＆なつかしのおもちゃ」のコーナーを設置しました。この他、鉄道模型の運行会や講演会などの関連イベントも開催し、子どもから大人まで、鉄道を満喫できる展示会となりました。

（学芸主査　圓谷昂史）

CONTENTS

2 博物館活動紹介
樺太警察部の辞令

3 展示紹介・第4テーマ
夢の大衆車「トヨタ・パブリカ」

4 研究活動紹介
高齢者福祉施設レク担当者の博物館への意識とは

6 解説案内スタッフレポート
展示室巡回中！博物館と人、心温まる出逢いへ
道民参加型展示
「北海道化石会のアンモナイト」開催

7 アイヌ民族文化研究センターだより
第18回「アイヌ文化巡回展」を広尾町で開催しました

8 活動ダイアリー
2024年6月～2024年8月の記録

博物館活動紹介

樺太警察部の辞令

石子智康
研究部歴史研究グループ　学芸員

採用や人事異動の際に渡される辞令。現代でも辞令交付を行う行政機関や民間企業もあり、辞令を受け取ったことがある方も多いのではないでしょうか。今回は、当館にも収蔵されている辞令についてご紹介します。

◇

写真１は、1923（大正 12）年、樺太庁から北見庸蔵へ交付されたもので、「樺太庁巡査ヲ命ス／月棒三十六円給与」とあります。樺太庁とは、戦前期に日本が領有していた樺太において、1907（明治 40）年に設置された行政機関です。樺太の警察は、樺太庁警察部として、樺太庁内の一組織でした。近代日本の警察は、犯罪を未然に防ぐことを目的とした行政警察が中心であり、そのほか刑事警察、思想や民衆運動、新聞検閲などを取り締まる高等警察、医事や衛生分野など、警察の職掌は多岐にわたっていました。現代よりも、民衆の生活空間に深く介入し、対内的な治安維持を担っていたといえます。

では、辞令を受け取った北見庸蔵とはどのよう人物であったのでしょうか。北見は 1896（明治 29）年生まれで、北海道庁警察巡査（1921 ～ 23）、樺太庁警察巡査（1923 ～ 1930、写真１・２）を務めた後、札幌師範学校にて剣道師範を務めた人物です。樺太庁警察部在勤時の 1929（昭和４）年には、昭和天皇の即位を記念し開催された「御大礼記念武道大会」に樺太代表として出場しています。この記念武道大会府県選士部門では、北海道および各府県に加え、台湾、樺太、朝鮮、関東州でそれぞれ予選が行われ、勝ち抜いた代表が出場する大会でした。各代表 51 人が一部から八部に分かれた総当たり戦が行われ、北見は第八部に出場し、５戦５勝。第八部で優勝しています。当時の新聞では、「物の見事に粉砕し直ちにがい袖一触新版図のため万丈の気を吐いた」とあり、北見のコメントとして、「僥倖です全く運が良かつたんでせう、たゞ一生懸命です」と紹介している（東京日日新聞北海道樺太版「見事五人を倒し／天晴れ天覧試合へ」、1929 年５月５日付）。翌日、昭和天皇臨席のもと、各部の勝者によって行われた「天覧試合」で、準決勝まで進出し、惜しくも敗れています。

今回は、樺太庁巡査の辞令を紹介しました。単なる１枚の辞令ですが、人物の背景には、歴史的事象との関わりがあり魅力的な資料だと個人的には思っています。

また、当館の近隣にある北海道開拓の村には、今回ご紹介した北見庸蔵と関わりの深い「旧札幌師範学校武道場」が保存されています。そちらにも足を運んでいただけますと幸いです。

※引用文は読みやすさのため、旧字体を新字体に改めています。

参考文献：
大日本雄弁会講談社編『昭和天覧試合』、大日本雄弁会講談社、1930 年
長谷川吉次編『増改訂版北海道剣道史』北海道剣道新聞社、1986 年
『警察協会雑誌』346 号、警察協会、1929 年

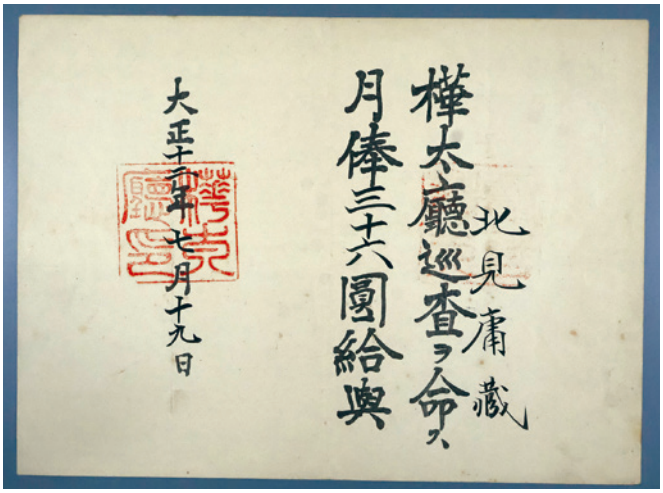

写真１：樺太庁巡査へ任命する辞令

写真２：樺太庁巡査を免ずる辞令

総合展示資料紹介・第４テーマ

夢の大衆車「トヨタ・パブリカ」

会 田 理 人
研究部生活文化研究グループ　学芸主幹

1961（昭和36）年6月にトヨタ自動車工業株式会社（当時、以下「トヨタ」）から発売されたのが、「パブリカ」（UP-10型）です。車名は一般公募で決まりました。主要スペックは別表のとおりで、価格は当時の金額で38万9,000円。この年10月の国家公務員上級甲種（大学卒）職員の初任給が1万4,200円でしたから（『続値段の明治・大正・昭和風俗史』、週刊新聞編、1981年）、車の購入は夢の物語という時代。それでも、発売当時は、破格の安さであると大きな話題になりました。

優れた実用性を誇りながらも価格を抑えることができたのは、ヒーターやラジオ、燃料計やサイドミラーでさえも標準装備から外すなど、徹底したコスト削減に努めた結果でした（当時の基準では、サイドミラーの非装備は合法）。

パブリカはさまざまな派生モデルが追加発売されていきます。なかでも、1963年（同38）年7月に登場した「パブリカ・デラックス」（UP-10D型）は、この車の販売台数を大きく向上させるきっかけになりました。第４テーマで展示・紹介しているのが、まさにこのモデルです。発売当初の標準型と比べて、リクライニングシートやラジオ、ヒーターなどを装備し、内装にはクロームメッキ（光沢のある銀白色に輝く加工）が施されたモールディングが採用され、大型バンパーなどの装飾も追加されるなど、「デラックス」らしい仕様となりました。

◇

パブリカが誕生する背景には、政府が掲げた「国民車構想」という考えがありました。

1955（昭和30）年5月、通商産業省（現在の経済産業省）が「国民車育成要綱案」を発表します。この要綱案で掲げる国民車の条件は、①最高時速100km以上、②定員4人、③エンジン排気量350～500cc、④燃費30km/ℓ以上、⑤販売価格25万円以下、などが含まれる厳しい内容でした。この条件を満たす自動車を国内メーカーから募り、試験を通して量産に適した1車種を選び出し、財政資金を投入して育成を図るという狙いがありました。メーカーにとってはあまりにも難しい条件だったため、この構想は実現しませんでした。トヨタは独自の要件を考えて小型車の開発を進め、開発されたのがパブリカでした。

パブリカ・デラックス（UP-10D型）

◇

このような背景をもとに誕生したパブリカですが、想定していたほどには販売台数を伸ばすことはできなかったといいます。

「国民車構想」を元に開発が始まり、販売に至るまでの数年間の間に国内の経済成長が予想以上に進んだ結果、パブリカの装備はあまりにも質素すぎたのです。国民の「夢」である自動車であるからには、実用性・経済性に加えて、「夢」のある高級感をともなう車であることが求められる時代になっていたのでした。

この新たな「夢」に応えるためにトヨタが開発したのが、カローラでした。

参考：「トヨタ自動車75年史」
https://www.toyota.co.jp/jpn/company/history/75years/
『世界「失敗」製品図鑑「攻めた失敗」20例でわかる成功への近道』、荒木博行、日経BPマーケティング、2021年）

全　長	3,520mm
全　高	1,380mm
全　幅	1,415mm
車両重量	580kg
最高速度	110km/h
定　員	4名

エンジン種類	空冷２気筒水平対向式
総排気量	697cc
最高出力／回転数	28PS/4,300rpm
最大トルク／回転数	5.4kgm/2,800rpm
変速機	4速コラムMT
駆動方式	FR

パブリカ（UP-10型）　主な仕様

研究活動紹介

高齢者福祉施設レク担当者の博物館への意識とは

青 柳 かつら
研究部博物館研究グループ　学芸主幹

1974年稚内市生まれ。北海道立林業試験場研究職員を経て2009年より当館学芸員。2011年に筑波大学で博士（環境学）取得。写真は、「森のちゃれんが宝箱」展での担当展示コーナーの前で。

老人デイサービスセンターへのアンケート

近年、社会の高齢化が進展し、高齢者は博物館の主要ユーザーになりつつあります。当館では健康な高齢者団体による利用を上回るなど、介護の必要な高齢者福祉施設団体による博物館利用も多数となっています[1]。

一方で、高齢者福祉施設の方々がどのように博物館を意識しているのかは十分明らかではありません。ここでは、アンケートで把握した、高齢者福祉施設のレクリエーション（以下、レク）担当者の博物館への意識について紹介します。

この研究では、高齢者福祉施設の中から老人デイサービスセンター（以下、センター）をとりあげました。センターは、サービスの一環としてレクを提供していること、介護度が比較的軽い利用者が多く、道内博物館における高齢者団体利用の主体としては、高齢者福祉施設の中で最多となっている[2]ことが注目されます。

アンケートは、石狩地域、上川・留萌・宗谷地域に所在するセンターのレク担当者588名を対象としました（有効回答率35.4%）。地域を合計したデータの一部は、北海道内の博物館職員へのアンケート結果[2]と比較しました。

70%弱は博物館利用経験がある

まず、レクで利用したことのある博物館について、選択肢のうち「いずれも利用なし」は全体で32.2%で、これを除く、70%弱の多数のセンターは博物館を利用した経験がありました。

内訳は、石狩（40.7%）、上川・留萌・宗谷（52.4%）とも、「博物館・郷土資料館」が最多で、全体でも最多44.2%を占めました（表1）。

高齢者が魅力を感じる展示「懐かしい昭和の暮らし」が約86%

高齢者が魅力を感じる展示について、石狩（85.5%）、上川・留萌・宗谷（85.7%）とも、「懐かしい昭和の暮らしに関するもの」が最多でした。全体でも、「懐かしい昭和の暮らしに関するもの」が群を抜いて最多85.6%を占めました。次いで、「高齢者がかつて経験した自然に関するもの（51.9%）」、「さわれる、音、匂いなど視覚以外の体験型展示（47.6%）」が僅差で多数でした（表2）。

博物館職員の結果との比較

一方、上記の地域を合計したデータ

表1　レクで利用したことのある博物館［複数回答可］

回答区分＼地域区分	石狩（N=145）		上川・留萌・宗谷（N=63）		全体（N=208）	
	回答数	比率（%）	回答数	比率（%）	回答数	比率（%）
博物館・郷土資料館	59	40.7	33	52.4	92	44.2
動物園	46	31.7	18	28.6	64	30.8
植物園	26	17.9	6	9.5	32	15.4
科学館 **	10	6.9	17	27.0	27	13.0
美術館	16	11.0	9	14.3	25	12.0
水族館 **	21	14.5	0	0.0	21	10.1
いずれも利用なし	43	29.7	24	38.1	67	32.2

注1）回答総数は、石狩221、上川・留萌・宗谷107、全体328である。
　　1事業所あたりの選択肢回答数は、石狩1.5、上川・留萌・宗谷1.7、全体1.6である。
注2）χ^2検定により回答区分の分布は調査区分で異なる（p <0.001）。
注3）残差分析により調査区分で差がある（**：p <0.01）。

表2　高齢者が魅力を感じる展示［複数回答可］

回答区分＼地域区分	石狩（N=145）		上川・留萌・宗谷（N=63）		全体（N=208）	
	回答数	比率（%）	回答数	比率（%）	回答数	比率（%）
懐かしい昭和の暮らしに関するもの	124	85.5	54	85.7	178	85.6
高齢者がかつて経験した自然に関するもの	70	48.3	38	60.3	108	51.9
さわれる、音、匂いなど視覚以外の体験型展示	70	48.3	29	46.0	99	47.6
郷土の自然・歴史・文化に深く根ざしたもの	53	36.6	26	41.3	79	38.0
北海道の産業やものづくりに関するもの	29	20.0	22	34.9	51	24.5
健康維持やセラピー的な効果を意識したもの	35	24.1	14	22.2	49	23.6
高齢者のアイディアを活かした内容、高齢者の出品によるなど、参加型展示	31	21.4	16	25.4	47	22.6
戦争中の手紙や日記、暮らしに関するもの	30	20.7	12	19.0	42	20.2
その他	1	0.7	0	0.0	1	0.5

注）回答総数は、石狩443、上川・留萌・宗谷211、全体654である。
　　1事業所あたりの選択肢回答数は、石狩3.1、上川・留萌・宗谷3.3、全体3.1である。

表３　高齢者が魅力を感じる / 人気の展示［複数回答可］

回答区分 ＼ 調査区分	レク担当者 (N=208)		博物館職員 (N=54)	
	回答数	比率（%）	回答数	比率（%）
懐かしい昭和の暮らしに関するもの ***	178	85.6	35	64.8
高齢者がかつて経験した自然に関するもの ***	108	51.9	6	11.1
さわれる、音、匂いなど視覚以外の体験型展示 **	99	47.6	4	7.4
郷土の自然・歴史・文化に深く根ざしたもの	79	38.0	19	35.2
北海道の産業やものづくりに関するもの	51	24.5	16	29.6
健康維持やセラピー的な効果を意識したもの **	49	23.6	0	0.0
高齢者のアイディアを活かした内容、高齢者の出品によるなど、参加型展示 **	47	22.6	1	1.9
戦争中の手紙や日記、暮らしに関するもの	42	20.2	8	14.8
その他 **	1	0.5	9	16.7

注 1）回答総数は、レク担当者 654、博物館職員 98 である。
　　1 人あたりの選択肢回答数は、レク担当者 3.1、博物館職員 1.8 である。
注 2）χ^2 検定により回答区分の分布は調査区分で異なる（p <0.001）。
注 3）残差分析により調査区分で差がある（**：p <0.01、***：p <0.001）。

を博物館職員の結果と比較すると、両調査の回答区分の分布には有意差が見られました。

レク担当者の回答は、博物館職員よりも「懐かしい昭和の暮らしに関するもの」、「高齢者がかつて経験した自然に関するもの」（以上、p<0.001）、「さわれる、音、匂いなど視覚以外の体験型展示」、「健康維持やセラピー的な効果を意識したもの」、「高齢者のアイディアを活かした内容、高齢者の出品によるなど、参加型展示」（以上、p<0.01）の比率が高く、「その他」（p<0.01）の比率が低くなっていました（表３）。

「高齢者が経験した自然」、「体験型展示」等はニーズに十分応えられていない可能性

両調査の比率の差について、有意差が見られた、「高齢者が経験した自然」、「体験型展示」、「健康維持やセラピー的な効果を意識した展示」、「参加型展示」等については、博物館職員の認識が薄かったり、博物館に該当する展示が少数で、センターのニーズに十分に答えることができていない可能性が明らかとなりました。

今後、博物館に行ってほしいサービス「出張型のレク」が 49%

今後、博物館に行ってほしいサービスについては、石狩では、「高齢者施設を訪問して、出張型のレクを提供してほしい」、「短時間の見学でも楽しめるように、お勧めの見学ルートなどを示したパンフがほしい（以上、各 47.6 %）」、「車椅子を押す人員など、介助を支援してほしい（46.2%）」が僅差で多数を占めました。上川・留萌・宗谷では、「高齢者施設を訪問して、出張型のレクを提供してほしい」が最多 52.4%を占めました。全体では、「高齢者施設を訪問して、出張型のレクを提供してほしい」が最多 49.0%を占めました（表４）

アンケートからわかること

以上、センターのレク担当者の意識をコンパクトに紹介しました。70%弱ものセンターは博物館利用経験があり、「懐かしい昭和の暮らし」等を人気の展示としているものの、高齢者のニーズの捉え方にはレク担当者と博物館職員とでギャップがあること、今後は出張型レクや来館時の介助支援の充実等に、センターの博物館利用拡大の可能性があることなどがわかりました。

本アンケートでは、他にも、博物館利用上の問題点や、博物館の利用等に影響を及ぼすセンターの属性等を調査しており、これらのデータや考察は下記のウェブページで紹介しています。

こうした調査結果も参考に、高齢者福祉施設と連携しながらニーズに応えていくことは博物館の高齢社会での役割発揮の１つになると考えられます。

末筆になりましたが、本研究にご協力くださった皆様にお礼申し上げます。

○本文の元となった調査報告は当館ホームページの「刊行物」、「北海道博物館研究紀要５号」「同１号」記事から PDF をダウンロードできます。

（１）青柳かつら　2020. 少子高齢社会のウェルビーイング創成型地域学習コンテンツの開発（Ⅱ）：北海道内老人デイサービスセンターにおけるレクリエーションと博物館利用に関するアンケートの解析から．当館研究紀要 第５号．
（2）青柳かつら 2016. 高齢者と協働するナレッジ活用型地域資源学習プログラムの開発：2015 年北海道と 2003 年全国の博物館園対象高齢者プログラムアンケート調査結果の比較から．当館研究紀要 第１号．
https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/study/publication/

表４　今後、博物館に行ってほしいサービス［複数回答可］

回答区分 ＼ 地域区分	石狩（N=145）		上川・留萌・宗谷（N=63）		全体（N=208）	
	回答数	比率（%）	回答数	比率（%）	回答数	比率（%）
高齢者施設を訪問して、出張型のレクを提供してほしい	69	47.6	33	52.4	102	49.0
車椅子を押す人員など、介助を支援してほしい	67	46.2	26	41.3	93	44.7
短時間の見学でも楽しめるように、お勧めの見学ルートなどを示したパンフがほしい	69	47.6	22	34.9	91	43.8
体験型展示（さわれる展示物など）を増やしてほしい	60	41.4	26	41.3	86	41.3
展示見学だけでなく、博物館施設内で回想法や体験などのレクを提供してほしい	42	29.0	19	30.2	61	29.3
回想法など、レクに使用できる教材を高齢者施設へ貸し出してほしい	39	26.9	17	27.0	56	26.9
質問に対応したり、展示場内で解説するスタッフを増やしてほしい	22	15.2	13	20.6	35	16.8
老眼鏡や拡大鏡を貸し出してほしい	7	4.8	4	6.3	11	5.3
その他	10	6.9	3	4.8	13	6.3

注）回答総数は、石狩 385、上川・留萌・宗谷 163、全体 548 である。
　　1 事業所あたりの選択肢回答数は、石狩 2.7、上川・留萌・宗谷 2.6、全体 2.6 である。

解説案内スタッフレポート

展示室巡回中！博物館と人、心温まる出逢いへ

堀　いくみ
学芸部道民サービスグループ　解説案内スタッフ

コロナウイルスの感染が下火になり、北海道博物館には日本各地、そして海外からもたくさんのお客様が訪れるようになりました。展示室を巡回していると、質問やご案内などの対応中にお客様からお話を伺う機会も多くあります。例えば、この展示資料「祖父母の家や実家にあった。」と、ご家族やご自身が使っていたという懐かしいお話。その反対に、この展示資料「初めて見た！」という新鮮さが伝わるお話。興味のある展示や資料について調べたことや気づいたことを伝えてくださる方も多くいます。

ある日、私のノートを見たお客様から「表紙のイラストが地元なんです。北海道に来て地元を見つけたことが嬉しい。」と声をかけていただきました。北海道の歴史や文化に興味を持ち鎌倉から北海道旅行中にご夫婦でご来館されたようでした。ノートを見ながら、「この場所は、紫陽花の中を通る江ノ電を撮りに、写真や鉄道を好きな方がよく来ている。近くには見所も多いし、美味しいお店もあるのでいつか遊びに来てほしい。」と地元愛が溢れるお話を聞かせてくださいました。後日、素敵なメッセージと共に博物館に１通の「絵葉書」が届きました。まだ、鎌倉旅行は叶っていませんが、いつの日か、この絵葉書とノートを持って同じ景色を観に行きたいと思っています。

博物館は、様々なお客様に足を運んでいただき感想や思いを共有できる場であるとも思います。博物館へ来館された際には、ぜひお気軽にお話を聞かせていただけると幸いです。

写真　絵葉書とノート

道民参加型展示

「北海道化石会のアンモナイト」開催

圓谷昂史[*1]・成田敦史[*1]・久保見　幸[*2]
研究部自然研究グループ　学芸主査[*1]　学芸員[*2]

当館では、平成 27（2015）年の開館以降、博物館活動への道民参加を促進する取り組みの１つとして「道民参加型展示」を実施しています。この展示は、道民や各種団体などが発信者として、当館の展示の一部を博物館と協働で制作するものであり、年１回更新をしています。会場は、中二階の休憩ラウンジにあります。ここは、来館者がくつろぐことのできる無料のエリアのため、開館時間中はいつでも展示をご覧いただくことができます。

令和６（2024）年度は、昭和 45（1970）年に三笠市幾春別で発足した「北海道化石会」（以下、化石会）と協働し、北海道から産出したアンモナイト化石など 31 点を展示しました（写真１・２）。展示資料の選定やキャプションの制作、これらの設置などの展示作業は、私たち学芸員も一緒に行いますが、基本的には化石会会員が行いました（写真３）。

北海道は、アンモナイト化石の産地として世界的に有名であり、これらの化石は全国の博物館で展示されています。各博物館で展示される化石は、館所蔵の資料が中心となるため、普段でも目にすることはできますが、今回展示した化石は、化石会会員が所有する秘蔵の一品、という点がこの展示の大きな魅力といえます。当館にお越しいただいた際には、休憩ラウンジにある「道民参加型展示」にもご注目いただければ幸いです。

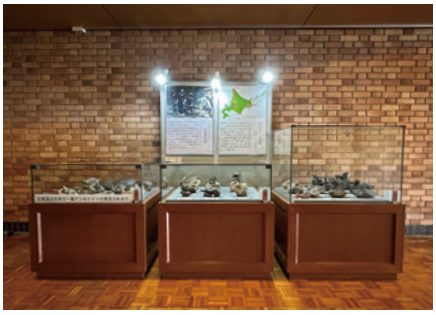
写真１　道民参加型展示

写真２　アンモナイト化石

写真３　展示作業

アイヌ民族文化研究センターだより

第18回「アイヌ文化巡回展」を広尾町で開催しました

当館が毎年道内各地で開催している「アイヌ文化巡回展」。

その第18回「アイヌ語地名を歩く～山田秀三の地名研究から～」2024広尾町を、広尾町教育委員会との共催により、今年（2024年）6月12日から26日まで、広尾町児童福祉会館（広尾郡広尾町東2条10丁目1）にて開催いたしました（写真1）。

＊　＊　＊　＊　＊

展示では、当館が収蔵する、アイヌ語地名研究の第一人者である山田秀三氏（1899～1992）の資料の中から、1970年代に広尾やその周辺で地名調査を行ったときの調査記録のファイルや書き込みのある地形図などをパネルにして紹介しました（写真2）。

特に広尾町については、山田秀三氏が広尾町郷土研究会――とりわけその中心的存在だった太田善繁氏（1922？～2013）――と交友があり、山田氏は、同会の活動が北海道文化財保護協会から表彰を受けたことを記念した講演会で講師をつとめるなど、複数回にわたって広尾町を訪れています。

展示では、地名調査に関する資料とともに、山田氏が広尾での講演会で配った資料などもパネルにして紹介しました（写真3）。

＊　＊　＊　＊　＊

約2週間の展示期間のあいだに、299名の方々にご来場いただくことができました。また、会期中には当館職員による関連講座を実施し、山田秀三氏の地名研究や十勝地方のアイヌ語についてお伝えする機会を持つことができました。

末尾になりましたが、広尾町立図書館をはじめ、この巡回展の開催にあたりご支援・ご協力をいただいた皆様に、改めてお礼申し上げます。

写真1　巡回展ポスター

写真3　展示会場のようす

写真2　巡回展で紹介した資料の一つ、山田秀三氏による書き込みが入った5万分の1地形図「広尾」
（一部をトリミングして掲載しています。）

【開催記録】

■第18回アイヌ文化巡回展「アイヌ語地名を歩く　－山田秀三のアイヌ語研究から－」　2024　広尾町

＜会期＞

・2024（令和6）年6月12日（水）～6月26日（水）（6月17、24日休館）

・広尾町児童福祉会館
（広尾郡広尾町東2条10丁目1）

■関連行事（記念講演会）

「山田秀三と広尾」

＜日時＞

・6月12日（水）10:00～11:30
講師：小川正人
「山田秀三と広尾 ―広尾の地名調査資料や広尾の人びととの関わりにそって―」

・6月18日（火）19:00～20:30
講師：吉川佳見
「沼田武男が遺したアイヌ語十勝方言資料」

（アイヌ民族文化研究センター長 小川正人）

活動ダイアリー

2024年6月～2024年8月の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。

6月～7月（土･日･祝･振）
■はっけんイベント「紙でサンキャッチャーをつくろう」をはっけん広場で開催。**写真1**
6月1日（土）
■連続講座「ちゃれんが古文書クラブ③」を開催。　世話人：三浦泰之・東俊佑
6月2日（日）
■連続講座「アイヌ語講座～きほんのキ～②」を開催。講師：吉川佳見
6月9日（日）
■ミュージアムカレッジ「樹木を知る」を開催。　講師：孫田敏氏（スキャナグラファー）・水島末記・成田敦史。**写真2**
6月12日（水）
■第18回アイヌ文化巡回展「アイヌ語地名を歩く～山田秀三の地名研究から～」2024広尾町をオープン。会期：6月26日まで開催。
■アイヌ文化巡回展関連講演会「山田秀三と広尾ー広尾の地名調査資料や広尾の人びととの関わりにそってー」を開催（広尾町）。講師：小川正人。
6月14日（金）
■総合展示クローズアップ展示、第1テーマを展示入替。
①『蝦夷島奇観』写本から①：オットセイ猟 **写真3**
②近代の交通・通信を支えた駅逓
6月15日（土）
■ちゃれんがワークショップ「のこぎりでネームプレートをつくろう」を開催。講師：青柳かつら・山際秀紀・鈴木明世
6月16日（日）
■特別イベント「石の中からホンモノの化石を掘りだしてみよう！」を開催。講師：圓谷昂史・久保見幸・成田敦史・北海道化石会会員
6月18日（火）
■アイヌ文化巡回展関連講演会「沼田武夫が遺したアイヌ語十勝方言資料」を開催（広尾長）。講師：吉川佳見
6月22日（土）
■連続講座「ちゃれんが古文書クラブ④」を開催。　世話人：三浦泰之・東俊佑
6月23日（日）
■第22回企画テーマ展「北海道樹木万華鏡ースキャンアートと標本で見る木々のかたちー」閉会。**写真4**
6月30日（日）
■連続講座「アイヌ語講座～きほんのキ～③」を開催。講師：吉川佳見
7月7日（日）
■特別イベント　レクチャー＆コンサート「じっくり聴こう！アイヌ音楽」を開催。レクチャー：甲地利恵、コンサート：スルク＆トノト（芸能グループ）
7月13日（土）
■連続講座「ちゃれんが古文書クラブ⑤」を開催。　世話人：三浦泰之・東俊佑
7月14日（日）
■連続講座「アイヌ語講座～きほんのキ～④」を開催。講師：吉川佳見
7月15日（月・祝）
■「屋上スカイビュー特別開放」を開催。
7月19日（金）
■第10回特別展「みんなの鉄道　ーがんばれ！地域の公共交通ー」開会式を開催。
■第10回特別展「報道機関説明会」を開催。
7月20日（土）
■第10回特別展「みんなの鉄道ーがんばれ！地域の公共交通ー」をオープン。会場:特別展示室。会期：9月23日まで開催。**写真5**
7月27日（土）
■特別イベント　フォーラム「北海道の鉄道その魅力を伝える」を開催。講師：矢野直美氏（フォトライター）・依田英将氏（北海道テレビ放送アナウンサー）。
8月（土･日･祝･振）
■はっけんイベント「あじろパスケースを作って、旅に出よう！」をはっけん広場で開催。
8月3日（土）
■連続講座「ちゃれんが古文書クラブ⑥」を開催。　世話人：三浦泰之・東俊佑
8月4日（日）
■特別イベント　北海道「鉄道に取り組む学芸員」サミットを開催。講師：石川孝織氏（釧路市立博物館）・持田誠氏（浦幌町立博物館）・岡部卓氏（岩内町木田金次郎美術館）・伊藤大介氏（ニセコ町有島記念館）
8月8日（木）
■総合展示2階交流ゾーン小規模展示「探してみよう！地域のお宝－高齢者と協働する地域学習プログラムの開発－」の終了。
8月9日（金）
■総合展示クローズアップ展示、プロローグ、第2テーマ～第5テーマを展示入替。
⓪「化石の日」関連展示　植物化石と石炭
③「開発」とアイヌのくらし―消えたサノイベ集落―
④測量技師・川村カ子トと駅員・森竹竹市の活動
⑤乗る・引く・運ぶ、馬の道具
⑥バスに乗っていこう！
⑦植物名に見る「ホロムイ」の謎
8月10日（土）～12日（月・振）
■特別イベント「鉄道模型大運行会」を開催。実施団体：札幌急行鉄道模型クラブ
8月11日（日・祝）・12日（月・振替）
■「屋上スカイビュー特別開放」を開催。
8月17日（土）
■子どもワークショップ「トノサマバッタをさがそう」を野幌森林公園で開催。講師：表渓太・水島末記・堀繁久・自然ふれあい交流館スタッフ
8月24日（土）
■連続講座「ちゃれんが古文書クラブ⑦」を開催。　世話人：三浦泰之・東俊佑
8月31日（日）
■ちゃれんがワークショップ「年表で地球生命史を学ぶ！」を開催。講師：成田敦史・圓谷昂史・久保見幸

写真1

写真2

写真3

写真4

写真5

来館者数

○2024年6月～2024年8月
総合展示室　20,220人　特別展示室　11,651（内 特別展8,060）人　はっけん広場　2,682人
○累計（2015年4月～2024年8月）
総合展示室　853,728人　特別展示室　593,488人　はっけん広場　130,203人

森のちゃれんがニュース　第37号

発行日：2024年9月26日
編集・発行：北海道博物館
〒004-0006　札幌市厚別区厚別町小野幌53-2
Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657
ウェブサイト https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp
©Hokkaido Museum, 2024